

歯科口腔外科学

研究可能テーマ

研究可能テーマ	研究指導者	受け入れ可能院生数
<p>(1)細胞シート工学を応用した口腔組織の再生 歯科口腔外科の臨床において、歯周病や腫瘍切除により骨あるいは粘膜の欠損を生ずる症例は少なくない。これらの組織欠損には自家組織移植が広く行われている。しかし、移植にあたって組織採取部の更なる外科的侵襲と同部の組織欠損などが問題になる。先端生命医科学研究所との共同研究により、細胞シート工学を応用した新しい再生医療の可能性を研究する。 特に歯根膜細胞などの間葉系幹細胞シートや口腔粘膜シートの実用化に向けて基礎研究から臨床研究、治験まで行うことを目標としている。</p>	<p>安藤教授 岩田准教授 貝淵助教</p>	<p>1</p>
<p>(2)ダーモスコープによる口腔粘膜疾患の観察 ダーモスコープとはハロゲンランプや白色発光ダイオードにより病変部を明るく照らし、エコージェルや偏光フィルターなどにより反射光のない状態にして、10倍から30倍程度に拡大して観察する無侵襲の皮膚診断器具である。皮膚科領域でメラノーマと色素細胞母斑との早期鑑別、また基底細胞癌、脂漏性角化症、血管病変などの鑑別にも有用であるとされている。これを応用し視診と比較して扁平苔癬、天疱瘡、黒毛舌メラノーマを含む口腔内色素斑などの口腔粘膜病変、また白板症、紅板症などの前癌病変、初期扁平上皮癌の臨床診断精度の臨床研究を行っている。</p>	<p>岡本准教授 深田講師</p>	<p>1</p>
<p>(3)定量的感覚検査QSTを用いた口腔顔面痛（神経障害性疼痛）の研究 神経障害性疼痛の診断には定量的感覚検査（QST）を用いることが推奨されているが口腔内に特化した検査器は存在せず診断が困難である。口腔内の感覚を定量的に測定することは疼痛診断に不可欠であり、簡易的で正確な口腔用検査器の開発が必要である。本研究では、当科で開発した口腔用感覚検査器の再現性を評価し、疼痛モデルを用いた難治性疼痛発生メカニズムの解明および治療法の開発を目指す。また様々な疼痛患者に対する感覚検査のデータにより、正確な診断、治療法の選択、治療効果の判定を行う。</p>	<p>安藤教授 長縄助教</p>	<p>1</p>

*：医師免許取得者 対象